

幼稚園・保育園から小学校へ入学する際に子どもが感じる不安について

鈴木 邦 明

About Uneasiness of the Children Who Feel When Go to Elementary School from Kindergarten / Nursery School

SUZUKI Kuniaki

【要旨】

小学校一年生の入学時点では、通っていた幼稚園・保育園や家庭環境によって子どもに様々な点で違いがある。小学校一年生が不安に思っていることや幼稚園・保育園と小学校の違いについて、アンケート調査を行った。その結果、子どもは「通学」に対して大きな不安を持っていることが分かった。また、小学校入学に関して、小学校の様子が「分からない」ことから子どもは不安に感じていることが分かった。

【キーワード】

小学校入学, 子どもが感じる不安, 幼稚園・保育園と小学校の違い

I はじめに

小学校への入学は、子どもにとって大きな変化である。少子化の時代、幼稚園や保育園はそれぞれの園が特色を出すよう取り組んでいる。また、低年齢での早期教育が盛んになり、2, 3歳で英語や水泳、音楽などの習い事をしている姿は珍しいことではなくなっている。一方、経済的やその他の理由から、様々な体験をすることなしに育ってきている子どももいる。このように小学校に入学するまでにそれぞれの子どもが経験してきたことには大きな差がある。

細川ら(1999)⁽¹⁾によると、次年度小学校入学予定児に入学についての不安要素を聞いて

たところ、「勉強」、「トイレ」、「着脱」での不安傾向が強かった。また、「遊び」、「友達」については不安傾向が弱かった。また、伊藤ら(2001)⁽²⁾による入学後の調査では、「勉強」については不安傾向が低下していた。

新しい環境に入る事態は、環境移行事態と呼ばれるが、小泉⁽³⁾は中学校入学時の子どもの期待・不安と適応について検討している。その結果、期待・不安尺度の因子として5因子抽出し、その中で部活動への期待・不安が比較的重要な位置を占めていること、一部で兄弟の有無により中学校生活への移行の順調さが異なったこと等を報告している。中学校入学と小学校入学は、子どもの発達段階も異なり、学校の環境なども全く異なるが、

子どもが新しい環境にうまく適応していくには、適切な援助が必要と言える。

小学校一年生が小学校へ不適応（不登校）になるというケースがよく見られる。それらの理由は様々である。担任の教師との関わりの問題、相性の悪さなどの教師に関すること。学校や学級に対する不安の増大や集団生活を送る上での必要な能力が備わっていないなどの子どもに関すること。何かトラブルが起こった際にそれに対応するコミュニケーション能力が不足していることや子どもとの関わりが希薄であることなどの親に関すること。入学者名簿から漏れていたり、何らかの不備が入学時にあるなどの学校に関すること。それらが単発的に、複合的に作用し、子どもが学校に対して不適応となってしまう。

小学校一年生の入学時点では、通っていた幼稚園・保育園や家庭環境によって子どもに様々な点で違いがある。小学校一年生が不安に思っていることや幼稚園・保育園と小学校の違いについて、アンケート行う。その内容を把握することによって、子どもへの理解を深め、有効な指導や円滑な学級経営を行っていく上での基礎的な資料としたい。

II 方法

1. 対象：神奈川県横浜市にある公立小学校一年生27名（男子15名 女子12名）
2. 時期：2006年4月, 6月, 9月に調査を実施
3. 内容：学級担任である筆者が直接一年生に質問紙法で、次のことについて質問した

- (1) 学校生活で不安に思っていること（入学前, 6月, 9月）

入学前については、入学後の4月に入学前に思っていたことについて質問した。

項目は「通学, 給食, 友達, 国語の勉強, 算数の勉強, その他の勉強, 休

み時間, 先生, 運動, 掃除」とし、あてはまる項目について、いくつでも○をするよう求めた。

- (2) 幼稚園・保育園と小学校との違い

項目は「掃除, 校庭, 通学, 教室, 勉強, 食事, 遊び, 運動, 先生, 友達」とした。選択肢は「違う, 少し違う, 同じ」とした。

- (3) どんな時に不安を感じるか

項目は「分からない時, 失敗しそうな時, 怖い時, 怒られそうな時, 大変そうな時」とし、あてはまる項目について、いくつでも○をするよう求めた。

4. 調査校の状況

学校のある場所は神奈川県横浜市神奈川区で、JR横浜駅からも徒歩圏であり都市部である。学区に畑や田んぼは全くなく、鉄道では、JR東海道線, 京浜東北線, 横須賀線, 京浜急行線, 東急東横線, 横浜市営地下鉄, 道路では、国道1号線などが通る交通の要衝である。

学区の大部分が住宅地域で、中規模のマンションが多数あるエリアと一戸建て中心のエリアとがある。駅のそばは商業地域で、小規模の飲食店や商店が多く、工場が若干見られるという地域である。江戸時代の東海道の神奈川宿の一部が学区に含まれている。また、幕末の横浜開港にも関連の深い地域である。そのため、由緒のある神社の史跡などが多数ある。

通学に関しては、表1にまとめた。近年、広島県, 栃木県, 秋田県など日本中の様々な所で小学校一年生が被害者となる残虐な事件が起こっている。その事件の前後によって、様々な部分で学校や地域の対応が違っており、分けてまとめた。

III 結果

入学前, 6月, 9月に不安に思っていることについて、表2に示した。入学時点では、

表1 調査校の通学の状況

	事件前	事件後
登校	登校班での集団登校	登校班での集団登校 地域のボランティアの見守り
下校	教室で解散後、自由の下校 一年生は5月までは担任が引率し、 方面別で下校	全学年、学年でまとまって方面別集団下校（同じ 方向に帰る子どもがまとまって下校） 一年生は可能な限り担任が引率し、方面別で下校
その他	門は施錠なし 見守りはそれぞれの判断 不審者情報などは紙で配布	門は常に施錠（登下校時以外） 防犯カメラ、モニター付きオートロックを設置 登校時、門に常に教員が立つ ACG(Aoki Child Guard)の編成 登下校時の見守りなどを行う 不審者情報などを一斉メール配信システムと紙に て配信

表2 入学前、6月、9月に不安に思っていること（調査人数27人）

	入学前（人数）	6月（人数）	9月（人数）
通学	18	12	14
給食	17	5	10
友達	16	9	14
国語の勉強	13	2	5
休み時間	13	5	8
先生	12	3	4
その他の勉強	12	7	7
算数の勉強	11	2	6
運動	9	2	5
掃除	6	11	7

通学（66%）、給食（63%）、友達（59%）、国語の勉強（48%）、休み時間（48%）などに不安が多く見られ、運動（33%）や掃除（22%）についての不安は少ない。また、6月の時点では、通学（44%）、掃除（41%）、友達（33%）などに不安が多く見られ、国語の勉強（7%）、運動（7%）、算数の勉強（7%）については不安が少ない。9月の時点では、通学（52%）、友達（52%）、給食（37%）などに不安が多く見られ、先生（15%）、国語の勉強（19%）、運動（19%）については不安が少ない。

入学前、6月、9月の一人あたりの不安に思っている数について、表3に示した。入学

の時点では、平均で5.3個であり、6月の時点では、2.2個、9月の時点では、2.9個であった。

幼稚園・保育園と小学校の違いについて、表4に示した。掃除（85%）、校庭（54%）、通学（54%）、教室（50%）、勉強（42%）、食事（42%）などについて違うと答えた子どもが多く、運動（58%）、友達（50%）、先生（46%）などについて同じと答えた子どもが多い。

どんな時に不安を感じるかについて、表5に示した。何かに取り組む前には、分からない時（62%）、失敗しそうな時（62%）などが多く、実際に取り組んでいる時には、大変

表3 入学前, 6月, 9月の一人あたりの不安に思っている数 (調査人数27人)

時 期	入学前	6月末	9月末
一人あたりの不安に思っている数	5.3	2.2	2.9

表4 幼稚園・保育園と小学校の違いについて (調査人数26人)

	違う (人数)	少し違う (人数)	同じ (人数)
掃 除	22	1	3
校 庭	14	10	2
通 学	14	8	4
教 室	13	9	4
勉 強	11	10	5
食 事	11	9	6
遊 び	8	10	8
運 動	7	4	15
先 生	6	8	12
友 達	3	10	13

表5 どんな時に不安を感じるか (調査人数26人)

	分からない時	失敗しそうな時	怖い時	怒られそうな時	大変そうな時
何かに取り組む前	16	16	7	7	4
実際に取り組んでいる時	7	8	4	3	11

ような時 (42%), 失敗しそうな時 (31%) が多い。

IV 考察

1. 学校まで歩くことについて

前述の細川らの調査では, 登校に対して, 不安傾向はもっているものの, それ程強い不安傾向ではないとある。子どもの不安の多い順は, 勉強, トイレ, 着脱, 先生, 着席, 登校である。細川らの調査と今回の調査では, 調査の方法が違っている。細川らの調査では, それぞれの項目について, 「とても困った」から「とてもにこにこ」までの5段階から選択をした。また, 調査した子どもが属している学校が同じではないので, 慎重に比較する必要があるが, 今回の3回の調査では, 3回とも「登校 (学校まで歩くこと)」が子どもにとって一番の不安だという結果が出た。幼

稚園・保育園と小学校との違いに関する調査でも, 「違う」「少し違う」を合わせると26名中22名 (85%) が通学に関して何らかの違いを感じている。幼稚園では, バスでの通園を行っているところが多く, バスを待つ所までは親などが送り迎えをしている。保育園では保護者が保育園まで送り迎えをしている。両方とも, 親などが完全に送迎をしている形であり, 子どもが一人で通学することはない。

近年, 広島県, 栃木県, 秋田県など日本中の様々な所で小学校一年生が被害者となる事件が起こっている。これらの事件はテレビなどで何度も報道されていた。子ども達にとってそれ程身近な問題ではないにせよ何らかの影響は受けているだろう。通学や通学中に起こる問題は親にとって心配なことである。子どもの不安傾向の高さは親の不安を表したも

のだろう。学校は日々子ども達へ注意を喚起し、また保護者に対しても様々な協力をお願いしている。登下校になるべく保護者の付き添いをお願いしたり、なるべく集団で下校するようにしている学校が多い。しかし、集団で下校としても下校の一番最後の部分（集団から離れ、自分の家へ向かう部分）はどうしても一人にならざると得ない。家まで一人で歩かなければならないということで子ども、特に一年生にとっては不安を感じてしまうものなのだろう。この一人で歩くということは幼稚園・保育園では、全くなかったことであり、そのため子どもは不安を感じるのだろう。

そういったこともあり、学校は様々な対応をとっている。また、関連する企業は対応する製品の開発を行っている。以前はあまり見かけることがなかった防犯ブザーを今では多くの子どもが持っている。地域の敬老会などに協力を仰ぎ、子どもの登下校の時間に通学路に立ってもらうボランティアがいるところや、希望する保護者宛てに不審者情報等を一斉メール配信システムで配信もしているところもある。不審者情報などは情報ができるだけ速く伝わることで被害を小さくすることができる。まだ試行段階であるが、従来までの電話連絡やプリントによる配布より効果が高いようである。また私立小学校などでは、あるチェックポイント（駅や校門など）を通った際に保護者宛てに自動的にメールを送るといったサービスがある。このように様々な形で子どもを取り巻く環境を安全なものにしていくとする取り組みが続けられている。

子どもを取り巻く環境は、今の親が子どもだった頃とは大きくに違っている。中村⁽⁴⁾は現代の子どもはそれまでの子どもとはライフスタイルに変化があると指摘し、子どもの遊びの問題、食生活・食習慣の問題、睡眠不足とメディア漬けの問題がその原因であると述べている。今回のアンケートでの結果にも

あるように、子どもが不安だと感じていることは社会状況などに影響をされる。学校や保護者は上でも書いたように、通学児の子ども達をできるだけたくさんの目で見守る環境を作りたい。これには学校や保護者だけでは、十分に役割を果たすことはできないので、地域社会を巻き込んでいくことが求められる。

2. 不安に思っているものの数の変化について

表3にあるように、不安に思っているものの数は、入学前：5.3個、6月：2.2個、9月：2.9個と変化している。6月で数が減ったことについては、4・5月と子どもが小学校の生活に慣れ、色々な活動を行って行く中で、不安なことが減っていったのだろう。その後、9月で不安に思っているものの数が増えたことについては、色々な経験の中で、友達関係や勉強などについて、不安を感じるようになってきている。勉強は、入学当初と比べると学習内容が難しくなっており、そういったことも影響しているだろう。

3. 不安を感じる時について

表4にあるように何かに取り組む前（小学校入学前に小学校について思う時など）は「分からない時」「失敗しそうな時」に不安を感じている。また実際に何かをやっている時（小学校入学後、小学校での体験について思う時など）には、「大変そうな時」「失敗しそうな時」などに不安を感じている。

入学前に子ども達が感じていた不安は、小学校というものがどんなものであるかが分からずにいることからの不安であると言える。現在、次年度小学校入学予定者に小学校の様子を伝える活動はいくつか行われている。例えば、学校説明会、授業参観、幼稚園・保育園との交流などである。これらのものを今まで以上に量及び質を高めていくことで、小学

校入学にあたっての不安が減っていくであろう。

また、6月及び9月の調査結果にある不安は、実際に小学校の生活をした上で、その経験から不安であると感じている。それらは、「分からない」というものよりも、取り組んだ上で「大変そう」「失敗しそう」と感じているものである。6月の調査における掃除は典型的な例で、入学後、今まであまりやっていた掃除を実際にやってみて、その難しさ、大変さを感じている。しかし、9月の調査では不安だと思ふ子どもの数が減っていることから分かる通り、掃除自体はそれ程難しいものではないので、慣れていったことで不安だと思ふ子どもの数は減ってきている。

4. 友達関係について

小学校の一年生は色々な幼稚園や保育園から集まった子どもで構成される。そういったこともあり、同じ幼稚園・保育園から同じ小学校に来ている子どもが少ないケースもよくある。それらが入学前の不安となって表れているのだろう。これは、「小学校にどんな人がいるのか」、「友だちができるだろうか」といった不安である。

6月、9月の調査結果を見ても分かる通り、友達関係への不安は、入学後も1/3以上の子どもが感じている。これは実際にクラスの友達と関わり合う中で難しさを感じているものである。子ども達のコミュニケーションの能力の低下によるトラブルなどは多くが報告されている。星ら⁽⁵⁾は現在の子どもの状況について、家庭内の人数の減少による人との関わり方の少なさ、地域での異年齢集団での遊びの減少、自然相手の遊びからテレビゲームなど室内での人工的な遊びへの変化などを指摘している。斎藤⁽⁶⁾は、友だちがいないと不安だということから、本来友だちとへいえないような関係でもグループに属してしまい、

その中のトラブルからいじめなどが起こると述べている。小川⁽⁷⁾は子ども達の遊びが変化し、従来の戸外での子ども同士の遊びが姿を消し、室内にこもって一人で楽しむ遊びが増えている。そういったことから子ども同士の心が見えにくくなったと指摘している。

小学校一年生の様子を見てみると、言葉の獲得が十分でなく自分の思いを言葉で伝えることができないうえに手を出してしまったり、自分の思い通りにならないとすぐに泣き出してしまったりする子がいる。本来であれば、2～4才くらいで獲得すべき能力を獲得しないまま、小学校へ入学してきているという印象を受ける。

このように、人との関わり方が上手でない子ども達が多い状況では、色々な形で友達同士のトラブルが起こるのはとても自然なことである。それに対して子ども達が不安を感じることもあるだろう。教師や親は、子ども達に様々な子ども同士の関わりの中で、成功体験、失敗体験の両方を体験させることを大事にしたい。そういった関わりの中で、友達との関係についての基本的な考え方を作っていったり、具体的なスキルを獲得していくことになる。

5. 掃除について

6月の調査の際、11名(41%)の子どもが掃除を不安だと答えている。入学前の調査と比べて、全項目の中で掃除だけが不安の数値が大きくなっている。また、幼稚園・保育園と小学校の違いのアンケートを見ると、一番多くの子どもの22名(81%)が違っていると答えている。違っている内容は、幼稚園・保育園には掃除がなかったという意見が多く、「ほうきはやっていなかった」、「そうじは毎日ではなくたまにやっていた」などの意見があった。

掃除は、幼稚園・保育園と小学校で大きな違いがある。始めのうち(夏あたりまで)は

上手にやることができず、子どもは不安に感じている。しかし、掃除自体はそれ程難しいものではないので、徐々に慣れていっていると考えられる。9月の調査では、不安に思っている子どもが7人に減ってきていることからそれが伺える。掃除は、友達関係や学習の様に学校生活においての主要な要素ではない。また、スキルの獲得がそれ程難しいものではない。そういったこともあり、子どもが幼稚園・保育園と小学校で大きく違いがあると感じ、また、取り組むことに不安を感じているにも関わらず、学級経営を混乱させるような大きな問題にはならないことが多い。

6. 不安が減っているもの（学習・給食）について

子どもは、国語や算数などの学習に対して、入学前はある程度の不安を持っているが、ある程度やってみるとそれ程でもないと感じている。小学校に入学して、始めの数ヶ月は学校の生活に慣れることに主眼を置き、あまり難しい学習に取り組んでいないことも影響しているだろう。学習指導要領の改訂などから近年、学習内容が削られていることなどの影響も考えられる。

給食については、幼稚園では弁当であった所も多く、給食に慣れていないことからの不安であったと考えられる。保育園で給食に慣れていた子どもはあまり不安を持っていなかった。入学後、実際に給食を食べてみると味や量、マナーに関することも大きな不安でなくなったのだろう。近年、小学校においてあまり厳しい給食指導は行われていない。以前は、食べ終わらない子どもが、全てを食べるまで残されて一人で食べているということも見られた。最近では、そういった指導はあまり行われず「できるだけ食べる」といった指導が一般的である。そういったことも影響しているのだろう。

7. 課題

子どもを取り巻く状況の変化などもあり、これから小学校入学に関して、様々なトラブルが起こることが予想される。今回の研究では、教師が意識的に関わりを持つことによって減っていった不安なのか、子どもが学校生活に徐々に慣れていったことによって減っていった不安なのかが明確になっていない。

今後の課題としたい。

引用文献

- (1) 細川かおり, 伊藤照子ら, 「来年度入学予定児の小学校入学に対する不安と期待に関する予備的研究」, 鶴見大学紀要, 第36号, 1999, pp.75-87
- (2) 伊藤照子, 細川かおりら, 「来年度入学予定児の入学に対する不安と入学後の不安の変化について」, 鶴見大学紀要, 第38号, 2001, pp.81-88
- (3) 小泉令三, 「中学校入学時の子どもの期待・不安と適応」, 教育心理学研究, 第43号, 1995, pp.58-67
- (4) 中村和彦, 「子どものからだが危ない!」, 1版, 日本標準, 2004, pp.64-65
- (5) 星美智子ら, 「児童文化論」, 1版, 同文書院, 1990, pp.13-24
- (6) 齋藤孝, 「友だちいないと不安だ症候群につける薬」, 1版, 朝日新聞社, 2005, p.13
- (7) 小川信夫, 「情報社会の子どもたち」, 1版, 玉川大学出版部, 1993, pp.39-40